



図11 地上気圧傾度と県内新積雪量

も多くなる。(11図)にこの関係を示す。割合、相関も高いので、4節(2)式を作り直す次のようになる。

$$S_G = 1.10T + 4.82P - 27.3 \dots\dots\dots(3)$$

Tは500 MB 輪島気温(マイナス符号は付けない)

Pは広島～岐阜気圧差(mb)

標準偏差で ±16.2 mc, 平均誤差 13.0 cm

となり、前式より精度はやや良くなる。

9. むすび

以上、季節風に伴う降雪量の予報について簡単な方法ではあるが、従来より、いくらか定量的に結びつけることが出来た。しかし、降雪の問題は、まだわからないことが多く、現在、この解明が、気象庁の重要施策の一つに取りあげられ、推進に努力が払われている。レーダー網の展開とともに追々実態が明らかにされるはずである。期待したい。

参考文献

- 1) 川本・藤田・宮沢, 1963: 北陸不連続線による豪雪について, 日本気象学会, 気象研究ノート, 14, 56~70.
- 2) 立平・深津, 1965: 北陸豪雪のレーダー解析—名古屋レーダーによる, 日本気象学会, 天気, 12, 319~322.
- 3) 福田喜代志, 1965: 豪雪, 日本気象学会, 気象研究ノート, 16, 200~224.
- 4) 宮沢清治, 1962: 北陸地方の豪雪について, 気象庁, 研究時報, 14, 703~718.
- 4) 百瀬悦也: 電計資料を利用した季節風雪の予報 電子計算機室, OMEGA, 4, 4, 9~16.

【書評】

「大気汚染気象ハンドブック」

大気汚染研究全国協議会第3小委員会編
(コロナ社 1965年12月)

近時大気汚染によって起される種々の災害についての認識も深まり、種々の防除対策が講ぜられている。また新たに工場を設置する際の事前調査のうち、大気汚染の立場からは気象学的調査がその主要部分を占める。その地域の一般の気象条件は附近の測候所の資料を用いることもできるが、局地的状態については一般には特別の観測をするか測候所の資料から推定せねばならぬ。このようなときどんな項目について、どのような測器で、どのように観測するか。測候所の資料を使うとすれ

ばどうすればよいか。また大気汚染により被害の起る範囲はどれだけか、煙突の高さはどの程度にしたらよいか等々の疑問に直接答えてくれる本である。この意味で、気象専門家のみならず、公害関係者すべてに非常に便利な本であり、この種の本の出版も時宜を得たものと云えよう。多数の人々の共同執筆であるため、編集も大変であったと思われるが、1、気象学と3、大気拡散の章で同じく大気安定度について独立に説明されており、どちらかに他の項参照の一言を入れてほしい所である。

いずれにしても最新の図や表を十分に駆使して説明してあり、またばい煙規制法等の法律条例ものっており、大気汚染による公害関係者に役立つ本である。

(岡本雅典)

天気第13巻第3号(41年3月号)103頁の正誤

	誤	正
右段16行目	1965年	1956年
〃 27行目	様子	様子